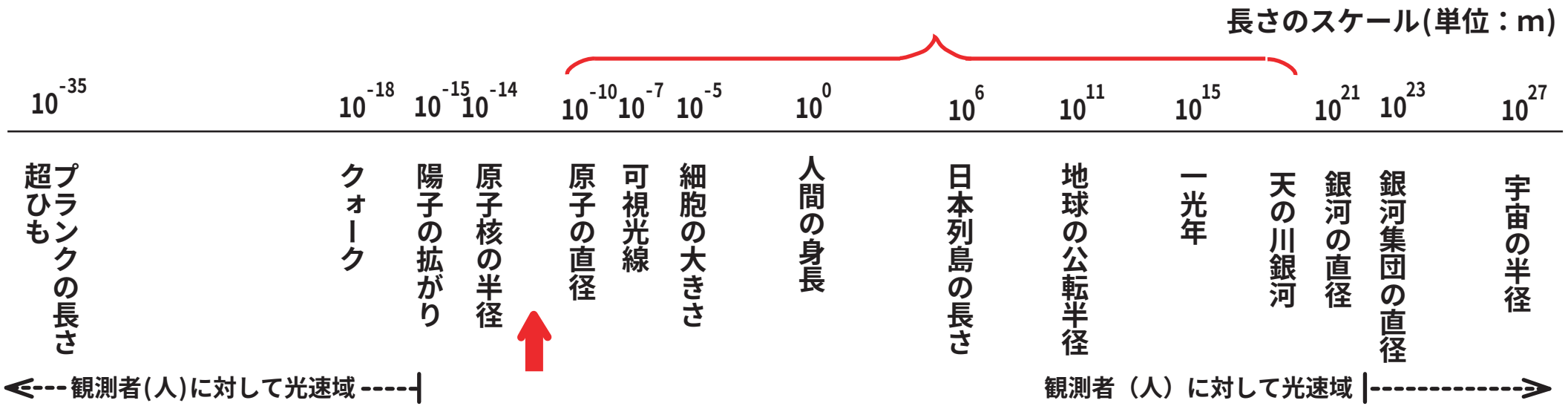

表　人の五感でわかる範囲　　「私の歩んだ道」中村誠太郎著：表１より加筆修正

岡潔「五感で分かるもの以外は無いとしか思えない。これが唯物主義である。」
「(望遠鏡、顕微鏡で拡大してもよい。)しかし、最後は肉体に備わった五感で分かるものでなければならない。」
「時間というものを表わそうと思うと、人は何時も運動を使う。直接わかるものではない。運動は時間に比例して起こると決めてかかって、そういう時間というものがあると決めてかかって、時間というものはわかると思っている。」
「人は時間の中なんかに住んでやしない。時の中に住んでいる。時には現在、過去、未来がある。その時の属性のうちに、時の過去のうちには｛時は過ぎ行く｝という属性がある。その一つの性質を取り出して、観念化したものが時間である。」

自然科学に関する考察

自然科学は位置を「時間」に置き換えた。人の五感で分かるのは、恐らく運動だけである。自然科学者は｛運動／時間｝の比率を直接測ったことはない。数学者岡潔の言葉をまとめると「時間とは過ぎ行く運動の記憶を観念化したもの」である。
従って、人の観念に過ぎない「時間」を運動の「現在」と「未来」に適用できるかどうかは別物であることに注意が必要である。
上表の極大・極小において｛運動／時間｝の比は光速度に近い。人の五感の基本は原子（陽子・中性子・電子）にある。
五感で分かる「事象の地平線」が表の赤い括弧端にあることになる。表の両端において、｛運動／時間｝の比率が変化しているかも知れない。
つまり自然科学は、近似である可能性がある。素粒子等は原子未満の欠片である。理論的に予言され実験により確かめられた素粒子群であるが、時間をパラメータとして組み立てた理論が実験という「現在」に適用できるか保証はない。特に表の両端において。
該当する素粒子群は存在するが、本当に理論に対応するかどうか分からない。弧理論の考え方では、陽子・中性子は内部構造を持たないのでクオークの存在そのものが怪しい。　表について、五感の限界と自然科学の｛運動／時間｝の比率問題の領域が重なっている。

20161104
No.5/5